

南蛮文化

場所 歴史資料館 企画展示室 期間 令和4年4月23日(土)～6月5日(日) 10:00～18:00

戦国時代、日本とポルトガルを初めとするヨーロッパとの交流が始まりました。

「南蛮人」と呼ばれた彼らが、貿易とキリスト教の布教を通じてもたらすものは、当時の日本人には未知のもでしたが、これらは積極的に受け入れられ、新たな文化を生み出しました。これを「南蛮文化」と言います。

南蛮文化の特徴の一つが「文化の融合」です。当時の工芸品や衣装などを見ると、ヨーロッパだけでなく東アジアの国々の要素が含まれています。また、キリスト教によって新たな知識や技術がもたらされますが、これが日本人による和洋折衷の技法による初期洋風画などへとつながります。

16世紀から17世紀初頭の日本を彩った南蛮文化は、江戸幕府によるキリスト教の禁止と「鎖国令」により終わりを迎えます。しかしながら、ヨーロッパという新たな世界との交流によって生まれた南蛮文化は、日本文化の歴史の中で大事な一コマと言えるでしょう。



南蛮船模型

制作年代：現代

資料群名：教育委員会資料

日本に渡来してきたポルトガル船の模型。南蛮貿易で使用された船のうち、本模型はカラベラ船と呼ばれる3本マストに三角帆を有するタイプである。これよりも大型の船がナウ船で、横瀬浦にも来航した。ポルトガルやスペインは、このような外洋航海を可能とする造船技術を獲得したことで世界の海に進出した。ちなみに、本模型は1990年に当時のマカオ政府から大村市に寄贈されたものである。



ランタカ砲

制作年代：15世紀～16世紀 制作地：ポルトガル 資料群名：教育委員会資料

南蛮船に装備されていた青銅製の小型の大砲。船の欄干などに装着して使用されたと考えられ、船の胴体に備え付けられる大型の大砲とは異なり、砲身の向きを変えることができる。日本では「石火矢」とも呼ばれている。

【南蛮貿易】

1543年、ポルトガル人が日本に鉄砲をもたらしました。以後、各地の大名たちは、自領の港に南蛮船を呼び込みますが、大村領では、大村純忠が1562年に横瀬浦を開港して以後、福田（1565）、長崎（1571）で南蛮貿易が行われました。

南蛮貿易は、主にマカオを拠点とするポルトガル人海商によって行われましたが、後にフィリピンを占拠したスペインが加わりました。彼らは、主に中国産の生糸を日本に持ち込み、これを石見銀山などで産出される銀と交換しました。また、ヨーロッパのものだけでなく、東南アジアの品物も多くもたらされ、これらは当時の日本人を魅了しました。



る そんつぼけんじょうおんれい つきとくがわいえやすごないしよ
呂宋壺献上御礼ニ付徳川家康御内書

制作年代：(慶長年間) 8月4日 作成者：徳川家康

受取人：大村喜前 資料群名：大村家資料

徳川家康が、大村藩初代藩主の大村喜前から「呂宋酒壺」と「瀆物壺」を贈られたことへの礼状。

「呂宋」とはフィリピンのルソン島のこと。「呂宋壺」は中国南部で生産され、ルソン島を経て日本に大量に入ってきていた。当時の日本では、茶の湯の流行から、茶葉の保存容器として需要が高かった。この書状は、大村氏が南蛮貿易を通じてフィリピン方面の品を入手していたことがうかがえる史料である。

猶あんへる一
送給一段見
事候
為遠路音信
呂宋酒壺一並
瀆物壺一被入念
送給祝着之至候
委細山岡道阿弥
可申候条不能具候
恐々謹言
八月四日 家康
大村丹後守殿

西洋風俗図

制作年代：江戸時代初期

作成者：不明 資料群名：教育委員会資料

遠近法や陰影法などの西洋画手法を用いた、日本の初期洋風画。日本人が伝聞した西洋の様子が描かれている。

手前にはポルトガル商人と見られる男性2人と、彼らに傘をさしかける裸足の男性が描かれている。マントや帽子を身に着けた商人との服装の差などから、この男性が使用人であるとわかる。

当時の日本人が、多様な人種を認識していたことを示す一枚。



【万国人物図】

アジアからアフリカ、アメリカ、ヨーロッパなど、世界各国の人々を男女セットで描いた絵です。旧大村藩主の大村家に伝わっていたもので、江戸時代後期に描かれたものと考えられます。全 41 枚。

神戸市立博物館所蔵の「せかいよんたいししゅうず 世界四大洲図・よんじゅうはちこくじんぶつびょうが 四十八国人物図屏風」にある人物図と、同構図、同サイズであることから、本来は神戸版と同様に世界地図の周りに配置されていたものが、何らかの理由で人物図のみ切り離されたと思われます。また枚数も、元は 48 枚だったと推測されます。

神戸版と比較すると、服の色などが違うものの、人物のポーズなどは同じです。江戸時代の人たちが世界の国々をどのようにイメージしていたのかがうかがえる、貴重な資料です。



阿蘭陀人（オランダ人）



南蛮人



北安女利加人（北アメリカ人）



【国名不詳】

【南蛮漆器】

戦国時代に始まった南蛮貿易で日本は西洋文化に影響を受け、また西洋人は日本の漆器に興味を持ちました。蒔絵に魅力を感じた宣教師たちは、日本の職人に蒔絵を施した祭具を発注するようになりました。その際、宣教師たちは異国風の幾何学模様を用いた品の発注をし、職人はそこに日本の植物のデザインを組み込みました。

一方、貿易で来日した西洋人たちも、蒔絵を施した装飾的なたんすや箱をヨーロッパで売ろうと考えました。特に、かまぼこ型の蓋を付けた洋櫃は輸出品の主要品目でした。貿易で文化が交流し、和洋折衷の漆器として生まれた南蛮漆器は、キリスト教の禁教や1639(寛永16)年以降の「鎖国」によって次第に姿を消していきました。



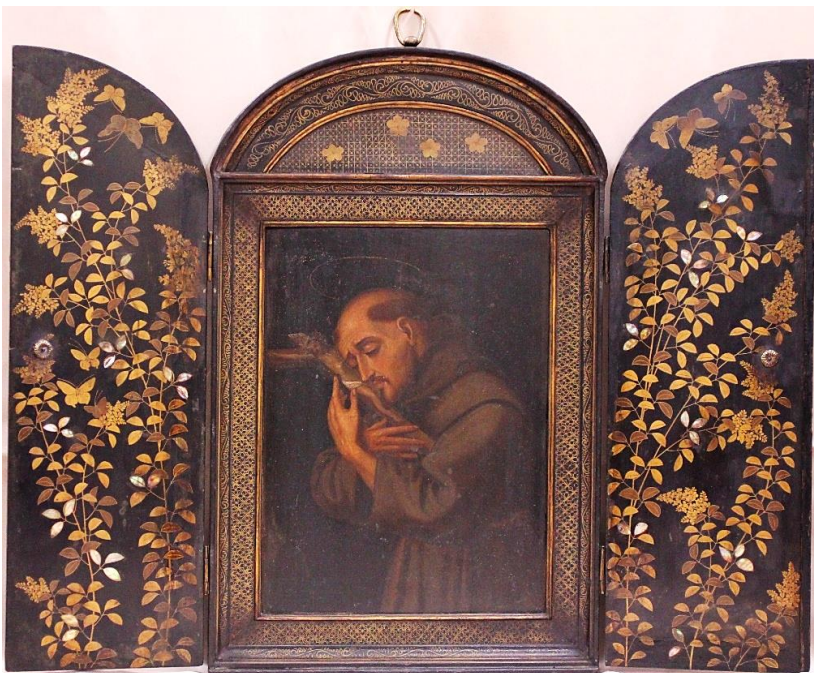
かじゅまきえらでんしょうようひつ 花樹蒔絵螺鈿小洋櫃

制作年代：桃山～江戸時代初期

作成者：不明

資料群名：教育委員会資料

本品は西洋人の注文に合わせて作られた国外向けのものと考えられている。このようなカマボコ形の蓋をもつものを洋櫃といい、その中でも小型の部類となる。器面の縁には螺鈿細工で鋸歯文を施し、金蒔絵で描いた花や樹木で全体を埋め尽くした華やかな品物である。



しだざくらまきえらでんせいがん 枝垂れ桜蒔絵螺鈿聖龕

制作年代：桃山時代 作成者：不明

資料群名：教育委員会資料

聖龕とは、観音開きの扉をもち、その中に板絵や聖画を納める携帯可能な祭壇のこと。教会だけでなく個人の家の壁にかけられたりして使用された。本品は十字架のキリストを抱く、聖フランチェスコと思われる人物を油彩で描いている。扉の表に桜、裏に萩や蝶を、アーチの部分には唐草模様を蒔絵と螺鈿で表現している。また、上部が円形アーチ状のものは聖龕の中でも珍しい。